

## &lt;前回&gt;オリエンテーション

## 後期：キリスト教と経済・環境

## 後期オリエンテーション

## 3. 自然神学の拡張と社会科学

- 3-1：自然神学とは何か
- 3-2：自然神学と社会科学
- 3-3：自然神学の規範的場としての聖書解釈

## 4. キリスト教思想と経済・環境

- 4-1：キリスト教思想から見た環境と経済 10/30
- 4-2：聖書と環境思想
  - 1：創造論から終末論へ 11/6
  - 2：社会的構想力——モデル、ヴィジョン 11/13
  - 3：エコ・フェミニズム 11/20
- 4-3：聖書と経済思想
  - 1：経済神学と聖書 11/27
  - 2：契約思想の射程 12/4
  - 3：イエス、パウロ、黙示論 12/11
  - 4：賀川豊彦とキリスト教社会主義 12/18
- 4-4：現代神学の動向から 12/25, 1/8,22
  - 1：プロセス神学
  - 2：政治神学
  - 3：科学技術の神学

## &lt;前回&gt;自然神学と社会科学

## 「問題：

自然神学が、他者とのコミュニケーションの可能性あるいは公共性に関わるものであるならば、それは、「キリスト教思想と自然科学」という問題領域に限定されないはず。」

自然科学から、社会科学そして人文科学へ

キリスト教から、諸宗教へ

↓

今後の方針。まず、「キリスト教思想と社会科学」からはじめる。

・環境と経済

1. マクグラス：キリスト教から諸宗教へ、自然科学を超えて

↓

- ・キリスト教と物理学・宇宙論、キリスト教と生物学・進化論（→遺伝子工学）
- キリスト教と心理学
- ・心というリアリティ（精神分析学、認知科学、脳神経科学）

↓

社会科学へ？

2. 唐沢かおり・戸田山和久編『心と社会を科学する』東京大学出版会、2012年。

↓

「心と社会」という問題連関を積極的勝実質的に論じることが必要である。

社会科学との接続は当然あるべき問題意識である。

従来の「心＝アトムの個」の集合体モデルの限界。心と社会との関係（「われ—われわれ」の関係）ははるかに複雑（従来のモデルはその粗雑な近似。社会はアトムの個に還元できない）。創発性概念に注目。

### 3. キリスト教神学と社会科学（1）

日本キリスト教団出版局・社会科学叢書

### 4. キリスト教神学と社会科学（2）、キリスト教神学と社会学（知識社会学）

Robin Gill, *Theology Shaped by Society. Sociological Theology. Volume 2*, Ashgate, 2012.

↓

前期の講義（リクール『イデオロギーとユートピア』）！

### 5. キリスト教神学と社会科学（3）、エスノグラフィと神学

### 6. 土肥昭夫『天皇とキリスト 近現代天皇制とキリスト教の教会史的考察』

新教出版社、2012年。

### 7. キリスト教自然神学の展開・拡張における「キリスト教思想と社会科学」

#### ・キリスト教的知を規定する社会性

イデオロギー批判、知識社会学

キリスト教的知の構成要素としての社会性

知の複合性 → 多様な方法論の連携

心と社会、そして宗教の関係性をめぐる理論構築

#### ・焦点としての「環境と経済」

キリスト教にとっての世界（「神の家族」の拡張）

↓

Eph 2:19: οἰκεῖνοι τοῦ θεοῦ

「家」としての世界 oikos

世界についての二つの学：eco-logy、eco-nomy

#### ・オイコスの間いとしてのオイコノミア：三位一体とオイコノミア

#### ・オイコノミアと政治の区別

古典的ギリシャの枠組み → キリスト教へ

## 3 — 3 : 自然神学の規範的場としての

### 聖書解釈

#### 1. 自然神学の社会科学の問題領域への拡張

#### 2. モデルとしての狭義の自然神学

聖書の創造論と自然学（形而上学）との共通の場としての「宇宙」

宇宙の秩序と人間の位置、そして悪

↓

自然神学と聖書

#### 3. キリスト教思想（神学）—聖書・聖書解釈—社会科学：社会、政治、経済

・自然神学としての基盤・規範としての聖書学：

S. Ashina

神学と諸科学との接点・コミュニケーション可能性。

神学と社会科学→人間学（人文学）、理念／現実

・人格的社会的連関：親密圏から公共圏

市民社会、国家・民族、国際・帝国

性、家族

#### 4. トレルチ『社会教説』

社会教説とは。教会、分派、神秘主義の三類型。自然法。経済、政治、家族。

Ernst Troeltsch, *Die Soziallehren der christlichen Kirchen und Gruppen*, 1912 (*Gesammelte Schriften* 1. Scientia Verlag)

『古代キリスト教の社会教説』（高野晃兆・帆苅猛訳）教文館。

#### 5. 『古代キリスト教の社会教説』より

・社会的なもの、社会学的宗教的基本図式、基本理念

・イエスの説教→絶対的個人主義と絶対的普遍主義

・理念と社会形成

「かかる社会教説によって近代的な状況にとって何か有用なまた価値あるものになり遂げられるかどうかということだけが問題なのである」(17)

「歴史的な勢力としての教会並びにキリスト教はあらゆる点においてその過去によって、つまり聖書と共にたえず改めてその影響力を及ぼしてきた福音によって並びに社会生活及び文化全体に関係する教義によって、規定されるという基本的事実にぶつかる」(18)

「《社会的なもの》(das »Soziale«)とはそもそも何を意味するのか」(20)

「《社会的なもの》の概念はむしろ今日よく知られた意味において一般的な社会学的な諸現象の特定の狭く限界づけられた断面、即ち国家的な規制と政治的な関心から解放された或いはかかるものからは二次的にのみ問題とされる社会学的関係を意味する。この社会学的諸関係は経済生活、住民間の緊張、分業、階級分化並びに直接政治的と関係づけられない他の二、三の関心から生じるが」、「今日の状況によって特に強調されている《社会》Gesellschaft と《社会的》social という言葉のこの狭い意味にわれわれは留まらねばならない」(24)

「近代科学が《社会》Gesellschaft という言葉で先ず第一に経済現象から生じる生活連関を考えているのは正しいであろう」(26)

「個人と共同体 Gemeinschaft の関係のキリスト教的秩序のような非常に普遍的な理念から生ずる社会学的基本見解 (Grundanschauung) はあらゆる生の関係が何らかの方法で影響を及ぼすところの社会学的基本図式 (ein soziologisches Grundschema) を意味するのは確かにもちろんのことである」(26)

「特に経済的一分業的《社会》Gesellschaft は宗教的理念から導かれる連帯 Gemeinschaftlichkeit とは異なった社会的基盤をもった独立した現象であり続ける」

「国家と社会 Gesellschaft とはわれわれの近代的な用語によってはじめて区別される。《社会》の特徴的なものは近代的な、形式的-法的国家概念との対立によってはじめて生ずるのである。この対立からはじめて社会という概念全体がその光と具体的な意味とを持つのである」(27)

「はじめから、キリスト教のすべての社会教説は同時に国家と社会についての教説でもあった。その際にキリスト教の人格的なものから出発する思考形式によって家族は同時に

国家と社会の前提であり、それ故キリスト教の社会教説に属している。宗教的な共同体理論にとって家族、国家並びに経済社会は密接に結びつけられた社会学的形成物として現れることによって、今やけれども再び《社会的なもの》の概念が拡大されるのである」(28)  
「いくつかの方針」「第一にキリスト教固有の社会学的理念とこの理念の構造及び組織について問わなければならないであろう」(31)、「第二には、この社会学的な形成物と社会的なるもの、即ち国家、経済的一分業的社会及び家族との関係について問わなければならないであろう」、「社会学的宗教的基本図式の他の生活環境への現実的な影響とはどのようなものであったか」(32)

#### 「第一節 福音」

##### Soziale Konsequenzen des Evangelisumus

「キリスト教の全体的な基本的方向を社会問題との連関において理解しようとする場合、決定的なのは、イエスの説教と新しい宗教教団の形成とは決して社会運動の創造ではないということ」、「中心にあるのは魂の救い、唯一神信仰、死後の生活、純粋な礼拝、正しい共同体組織、[キリスト教信仰の]実践的証明、神聖性に関するきびしい根本原則の問題」(36)、「神の国というのは至るところでまず第一に神によって支配される世界の倫理的並びに宗教的な理想状態である。この神によって支配される世界においては純内面生活のあらゆる真の価値が本当に認められ、そして力を得るのである」(37)

「古代社会の解体の過程」「大きな社会的解放運動、新しい階級の発生というような事にはなりえなかった」(42)

「キリスト教の擡頭は社会史からではなくて、古代の宗教史から理解されなければならない。宗教的な生は他の生のなかへ絡み合ってもやはりその固有な発展と固有の弁証法 Dialektik を持つのである」、「古代は、究極的には宗教的思考の内面化と倫理化から生じる民俗宗教の解体」「とともに、また四方八方から流れこんでくる力強い宗教的な新しい形成[運動]のなかで、終りを告げる」(48)

「キリスト教が古代の内的な宗教的發展からこのように理解されうるとすれば、そのことでもって同時にキリスト教の最初に言及された下層階級への方向とこの下層階級からキリスト教が出現して来たこととが説明される。[下層階級への方向という]この態度は社会的な[階級分化等の発展の]過程から形成されたものとして説明されるのではなく、宗教的な新しい形成の本質から説明される」、「本来的に創造的な、教団形成的な宗教的基盤は下層の[人たちの]業である」(49)、「存在するのは貧困」「素朴な啓示」「深い内的な力」(50)、「古キリスト教の文学全体は民衆伝承の特徴をもった」、「民衆的文学であり」(51)、「貧しさと素朴さとが真理の基盤なのである」(51-52)

「[キリスト教の]一切のものの根底にあるイエスの説教に第一に《社会的》問題設定を持ち込むということはそもそも誤りである。イエスの説教は明らかに純粋に宗教的な説教であり、そして神について並びに人間に関する神の意志についての特定の思想から発したのであった。宗教的な生の価値が彼にとって唯一の財産なのである」、「政治的並びに社会的解体は古い現世的な思想をここに[後期ユダヤ教]においても解体し、内的なるもの或いは超越的なものへの転向を暗示した」、「しかしこの宗教思想に社会学的問題設定を持ちこむこと、つまりこの宗教思想から個人と共同体の関係がどのように形成されるのか、ことごとくの大いなる思想に接続する社会学的構造をこの宗教思想からどのようにして掲

S. Ashina

載されるのか、を問うこと、こういうことは大いに許されうる」(58)

「イエスの説教の根本思想」「完成された神の支配の総括としての神の国の到来を告げること」「この神の国においては心情と純粋な意志の真の諸価値がこれらに与えられる栄光のなかで光を発するのである」、「神の国の来たることの保証を持ちまた準備のできている教団の集結」、「神の国はまさにあらゆる倫理的並びに宗教的な理想の総括である」(59)

「心の純粋さ Herzensreinheit」「純粋な心情倫理の性格」「内面的な見抜き」(60)、「人の心底を徹底的に探り、一切のものをすみずみまで、またきわめて精巧な自己欺瞞をも見抜く神」(61-62)、「福音はきびしい徹底主義に至る。福音は禁欲 Askese ではない。しかし実行可能性に関するあらゆる制約を無視するきびしいものである。しかしその際無邪気な生の喜びは決して破られない」(62)、「神を愛するという二重の命令」、「隣人を愛する」(63)

「この根本思想から社会学的構造が生じる。一方には無制約的なそして無条件的な個人主義がある。この個人主義はその尺度を純粋に自分自身のうちに、つまり神に対する自己検診に役立つものと思っているもののうちに持っている」、「この個人主義はその[その存在の]根拠と権利とを、人間が神との交わりのうちにあることに、或いはここでの表現に比べれば神の子であること」、「永遠の魂に召命されていることのうちに根拠をもっている」。「神の子である個人は無限に価値あるものとみなされる」(64)、「宗教的な基盤においてのみ可能」「神との交わりだけが個人にこの価値を与えるのである」、「あらゆる現世的なものをおおう共通の神関係においてのみ」「自然的な区別は消える」、「一切のものを把握しかつ一切の地上的な区別を無にする神の全能と愛の力のなかでは」「その他の一切の区別が消されてしまっている」「個人への選別的差別化だけがかろうじて存続する」(65)、「この絶対的宗教的個人主義、つまり自分を重んじる人格性そのものの相違を残しながら、一切の[自然的]相違のこの止揚は特に宗教的な根本思想から生じる強い共同体思想を含んでいる」(65-66)、「利他的な戒め」、「山上の説教」、「絶対的な個人主義はいろいろな魂の求め、神との親子関係へ招聘する父の意志への純粋な自己献身という宗教的理念から出ているように、同じ根本理念から絶対的な個人主義は神によって結ばれたものの絶対的な愛の共同をに、すべての異邦人や敵に対する神の愛の活動になる」、「福音の兄弟愛と隣人愛というのは単に親切や慈善一般だけではなくて、神において統一されたものの結束であり、愛の証明による真の生の価値に対する理解と現世執着性の融解である」、「この共同体はこの宗教的諸前提が存在するところでは絶対的である。この共同体はさがし、求める。しかし救いへの道は狭い」(66)

「かくて絶対的な個人主義から同じく絶対的な普遍主義が生成する」(entsteht aus dem absoluten Individualismus ein ebenso absoluter Universalismus)、「ここでは宗教的な理念(aus der religiösen Idee)から直接生じる絶対的な個人主義と普遍主義という社会学的二重性(Doppelcharakter)だけがわれわれの関心をひくのである。両者は要求しあう」、「このことを行う人は神の国の兄弟姉妹であり、それ故来たるべき神の国の初子なのである」(67)

「ヘブライの意志の神は、人間から離れているが、専ら生ける啓示において、つまり律法と預言者において、イエスがこの二つを解釈する権威において自己をあらわすのである。それでもって社会学的な構造のなかへ権威思想が導き入れられる」(70)

「全く異なった関心圏に属する社会学的問題に対する[信仰者の]関係がどのように形成されねばならないか」、「こういう関係が現世に属し、現世と共に変わっていく」、「イエスの説教は禁欲的ではない」、「宗教的な価値に直接関係しない一切のものにおいては倫理的価値を全然承認しないという立場に立つ宗教的ラディカリズムが発現する。イエスの倫理は禁欲的というよりも英雄的である」(71)

「国家については語られていない」「イエスの神の国は神の支配を意味するのであって、ユダヤ民族の支配を意味するのではない。ローマの国家は、きわめてかざりけのない言葉で、存続すること権利を神によって与えられているものとして承認されている」、「経済生活は、未来のことは神にゆだねるとすれば、素朴な明快さでもって、その日の事とみなされる」、「犠牲的な、わかち与える愛」「が真の信仰の最高の証拠である。そしてあらゆる財への断念が真に伝道に命をかける弟子となる条件である。神は労働によってすべての人たちにその生活の糧を見つけさせたまい、そして困窮の場合には愛を働かせたもう、ということは富は魂にとって危険なものという見方と共に福音の立場に立つ唯一の経済教説である」、「宗教的に要求される愛は同時に生活の困窮をも片付けうる最も簡単な手段として証明される」、「消費が健康であり続けるためには、控え目でなければならない」「貧者への特別な方向づけ」(72)

「貧しきたちへの方向づけのなかに神義論の一要素もあるように思われる。つまり、人間が理解することができない不幸と困窮が神の目においては救いへの道として証明される」、「その際に、説教は貧者に制限されるのではなく、すべての人たちに関係するのである」、「圧制者に対する戦いについては何もふれられていない。誤てる魂の指導者に対する戦いについてふれられているにすぎない」

「家族に対する彼の態度」、「イエスの弟子の原形姿、比喻の最も豊富な材料」、「一夫一婦の家庭における人格の個別化と家族結合の親密さは事実イエスの説教の宗教的個人主義並びに普遍主義と内面的に親しいものである」(73)、「あらゆる共同体生活の細胞、つまり家族に対して新しい社会学的理想が最も直接的かつ最も強く働きかける。しかしそれでも天国においては人間は性を失うであろう」(74)

「社会改革というような性格のプログラムは一切欠けている。そのかわりに現世の継続的な秩序のなかにありながら、愛の純粋に宗教的な共同体の中において、自己聖化の働きの中において神の国の到来に自らを備えるという要求がかかげられている」、「神の国そのもの」「社会的な新しい秩序ではない。この神の国は地上に新しい秩序をもたらす」(75)

「説教のまわりに永続的な共同体が形成されると、このプログラムから一つの社会的秩序も生じること、最初、純粋に宗教的に考えられた社会学的構造が他の生活内の社会組織に変るといこと、これらのことが必ず生じる。少なくとも愛の掟は小さな、人格的に互いに結ばれた信仰共同体をその経済的態度においても規定しなければならないし、また愛の掟を実現する最初の試みへと人々を導かなければならない」、「周子湯的愛の共産主義」(der religiöse Liebeskommunismus)「愛の掟の内的衝動こそが」「組織化を要求する」、「財を共有することを愛並びに宗教的犠牲の精神の証明とみなす共産主義」「消費の共産主義」「この共産主義における平等性の理念」(76)、「こういう共産主義はひょっとしたら小さな、同質的な教団のなかでは可能であったかもしれない。しかしこういう共産主義は世界伝道に対しては構造的にもまた基礎づけもあまりにも不安定であった」、「基本理念は魂の救いという理念に他ならない」、「それでもイエスの説教からは愛の共産主義という帰結が

S. Ashina

存続した。後の教団形成が困難な時には確かに再三愛の共産主義に近づいた」、「後の教父の理論的叙述」（77）、「革命的要素を含んでいる」、「現在ということに関しては教団はすでにパウロの時代から全く別の道を歩んでおり、しかも原理的には社会的に保守的な道を歩んで来た」（78）

「[福音の]思想全体を支配しているものはいずれにしてもこの社会的[性格をもった愛の共産主義という]帰結ではなくて、社会学的構造をもった宗教的理念から出発する理想的思想である」、「この理想的思想が十分に発展すると、この思想は人間関係を表わす社会学的基本図式を変更するだろう。社会的並びに政治的[領域への]諸帰結は不可避的になるであろう」、「現存するものに固有の精神を吹きこむであろう」

6. 理念：福音（説教）・神の国 → 社会学的図式：絶対的な個人主義と普遍主義

→ <歴史的状況> 社会的なものの形成：家族、経済、国家  
キリスト教の社会的三類型：教会、分派、神秘主義  
愛の共産主義

7. H・C・キー『初期キリスト教の社会学』ヨルダン社。

「キリスト教の起源を探究する多くの同僚たちと共に、近年私は、歴史的解釈の仕事をおし進めるための可能性に富んだ道具として、次第次第に社会学的諸研究の多様な見方に魅力を感じるようになってきた」、「社会学的方法が提案し、また要求していると思われるのは、社会科学からの分析モデルの適用である。」（5）

「（一）データが許す限り完全な形で、初期キリスト教の展開を史的に再構成し、（二）運動が残っていた証拠を、この資料を生み出した人々の思想世界に合わせ、共感するという仕方で解釈することが期待される。」（5-6）

「知識社会学」

「新約聖書中の二つの文書が」「国家と教会の問題を提出している。」

「一つはヨハネ黙示録で、これは偶像を崇拜する世俗の権力者を攻撃する点でダニエル書にならうものである。しかし、秘められた形式とシンボリズムでもって語られており、その意味は、文書が宛てられた秘教的グループにしか知られなかったであろう。」「自己防衛の場合であっても、抵抗や反乱のために武器をとるという傾向はもち合わせていない。」（126）

「社会的・政治的レベルでの葛藤を取り扱うもう一つの文書はルカ文書である。」「かなり巧妙で無理のない仕方で」「著者は、キリスト教の成立という出来事に直面した政治権力に言及すべく、何度もまわり道をする」（126）、「ルカ文書によれば、政治権力との緊張もかかわらず、キリスト教は、法律を守る非政治的な運動なのである。」（127）

「二、三世紀になると、キリスト教ははっきりその姿を現わした。分裂した帝国を統治する方策として皇帝を神とする風潮が推進されていく中で、キリスト教は、皇帝礼拝に反対する姿勢を保ち続けたのである」（127）

「キリスト教は、最良の状態にあった信者たちの信仰、弁証家や学者たちの知的熟練、社会的・民族的壁を越えた教団の包括性、真の世界性の主張などのおかげで、帝国の敵意にもかかわらず存続することができた。しかしキリスト教は、敵対に耐えたとはいえ、その過程で、神話に関しても、儀礼に関しても、変化する世界観に関しても、それゆえまた、キリスト教が与える人格的・社会的アイデンティティの感覚に関しても、根本的に変形された。」（128）

8. 大貫隆『福音書研究と文学社会学』岩波書店、1991年。

「新約聖書に収められた福音書は突然天から下ってきたものでも、地から湧いて出たものでもない。それは一定の歴史的コンテクストにおける人間の社会的相互行為の中から生み出され、さまざまな問題の解決のために働いたのである。そして、この働きはいずれの福音書の場合にも、広義の文学性と切り放し難く結びついている。本書は、福音書の本文を人間の社会的相互作用の中でも文学的・象徴的レベルで遂行された相互行為としてとらえ、それを規制する歴史的・社会的条件に対して革新的あるいは追認的に働く機能を分析しようとするものである。」(v)

「このため本書は従来の研究方法の枠を超えて、哲学的解釈学、文芸学(受容美学)、テキスト言語学、言語行為論、知識社会学とも積極的に対話し、その知見に学んで福音書研究の方法論的地平を拡大すべく模索しなければならない。」(v)

「ヨハネ福音書は新約聖書のなかでもその独自性において際立っている」、「この福音書も一定の教会共同体によって生み出されたものであるには違いない。しかし、この独特な福音書を生み出した教会共同体、つまり通常「ヨハネ教会」と呼ばれる共同体を構成していたのはどのような人々であったのか、またどのような歴史的・社会的状況の中でこの福音書を生み出したのか。彼らは歴史と社会にどのような姿勢で関わろうとしているのか。」

「これらは史的再構成に関わる問題である。」(86)

「ヨハネ教会の対社会的な構えを問うことは」(88)「社会学的な問いであり、彼らが生きていた全体社会および彼らの教会共同体の内部で、いったいどのような「間人間的」行動の類型が存在したのかを知ることなしには解明することができない」、「われわれにとっては」「ヨハネ福音書」「の本文から分析的に推論する以外に方法がない」、「一方における文学的テキスト」「他方それを生み出し、伝承し、受容し、解釈する者たちの間で交わされる社会的・間人間的行動という二つの事柄を、相互にどのように関連づけて考えるか、この点についての一般理論を参照しないわけにはゆかないのである」、「そのような一般理論を提供することが文学社会学の課題である。」(89)

9. 土戸清『ヨハネ福音書研究』創文社、1994年。

『初期キリスト教とユダヤ教——ヨハネ福音書研究の諸問題』教文館、1998年。

10. 「聖書から古代教会という」問題連関について。

聖書学の特殊性？

→ 聖書学を古代研究の中に位置づけるための方法論のすりあわせが必要。

聖書学の新しい動向に注目 → 自然神学的機能

Martin Hengel, *Eigentum und Reichtum in der frühen Kirche, Aspekte einer frühchristlichen Sozialgeschichte*, Calwer, 1973. (ヘンゲル『古代教会における財産と富』教文館。)

John Hegeland, Robert J. Daly and J. Patout Burns, *Christians and the Military. The Early Experience*, Fortress, 1985. (ヘルジランド、デイリー、バーンズ『古代のキリスト教徒と軍隊』教文館)